

交錯するまなざし、齟齬する満洲夢
『綴方日本』と『綴方満洲』の比較から見る日満関係のポリティクス
Discrepancy of Manchuria Dream Between Japan and Manchukuo
—A Comparative Study of *Tsudurikata Japan* and *Tsudurikata Manchu*—

魏 晨
Wei Chen

This paper is based on two tsudurikata works, *Tsudurikata Japan* and *Tsudurikata Manchu*, written by Japan-Manchukuo tsudurikata envoy. In 1939, the Japan-Manchukuo tsudurikata envoy held a Japan-Manchukuo communication event sponsored by South Manchuria Railway Company, and with the cooperation of the newspaper office. Through newspapers, five boys and five girls in Japan were selected as "Japan-Manchukuo tsudurikata envoy", and after having made a tour in Manchukuo, they were made to write an essay report. Based on the success of 1939, in 1940, Japan-Manchukuo tsudurikata envoy were selected from Manchukuo, and toured Japan, and in 1942 Japan-Manchukuo tsudurikata envoy were selected and dispatched again from Japan to Manchukuo. "*Tsudurikata Manchu*" which summarized the records of the Tsudurikata works and activities of the tsudurikata envoy of 1939, and "*Tsudurikata Japan*" which summarized the one of 1940 were produced respectively. By comparing the tsudurikata works recorded in "*Tsudurikata Japan*" and "*Tsudurikata Manchu*", Japanese<Inland> children and Manchuria children (including those Japanese who are in Manchukuo) presented a discrepancy in the perception of Japan, Manchukuo as well as the Japan-Manchukuo relations. The envoy from Japan <Inland> regarded Manchukuo as completely dominated by Japan <Inland> and was considered as a new paradise where the Japanese immigrate. On the other hand, the envoy from Manchukuo was thinking to build a cooperative relationship on the premise that Manchukuo is in equal position with Japan. While being proud of the progressiveness of Manchukuo as well as showing it to Japan <Inland>, they were also incorporating Japan's advanced experience into the construction of Manchukuo, in order to develop Manchukuo, showing their strong willingness to build Manchukuo and the future by their own hands. Therefore, in Manchukuo, it was clear that the children who are different from those in Japan <Inland>, also known as the next generation of Manchu existed. Recognizing this discrepancy leads to a fundamental question of what was Manchukuo, and when considering the condition of Japanese society or the relationship between Japan and Asia after the war, this discrepancy of recognition that occurred before the war is a key point to explore the historical origin of various problems.

キーワード 「満洲国」 Manchukuo 綴方 *tsudurikata* 日満関係 *Japan-Manchukuo relations*
日満綴方使節 *Japan-Manchukuo tsudurikata envoy*

1. はじめに——日満綴方使節と『綴方満洲』・『綴方日本』

本稿は日満綴方使節に書かれた二冊の綴方集『綴方満洲』と『綴方日本』を取り上げて考察

する。1939 年、南満洲鉄道株式会社（以下満鉄と略称する）が主催し、「東日小学生新聞」、「大毎小学生新聞」などのメディアの協力を得て、日満綴方使節という日満交流イベントが行われた。共催新聞を通して、日本で男子・女子生徒を五名ずつ綴方公募で選抜し、「満洲国」を見学させた後、見聞記を綴らせるというものである。参加した生徒は「日満綴方使節」と呼ばれた。1939 年の成功を踏まえ、1940 年には「満洲国」から日満綴方使節を選抜し、日本を見学させ、1942 年には再び日本から「満洲国」へ赴く日満綴方使節を選抜・派遣している¹。1939 年の綴方使節の綴方作品と活動の記録をまとめた『綴方満洲』、1940 年のものをまとめた『綴方日本』がそれぞれ制作された。

日満綴方使節に関する先行研究は二件しかない。「日満綴方使節」とその作品——昭和十四年「東日小学生新聞」の懸賞「綴方」について」（熊木哲『大妻国文』2003 年 3 月）は「東日小学生新聞」における綴方募集から日満綴方使節決定までの経緯を考察し、新聞に掲載された入賞綴方作品を対象に分析したものである。結論として、日満綴方使節を「国民精神総動員新展開」の児童向けキャンペーンであった」と位置づけた。しかし、第一回目のみを取り扱っており、計三回行われた日満綴方使節活動の全貌を明らかにしたとは言えない。加えて、日満綴方使節は「国民精神総動員運動」の一部ではあるが、これは〈内地〉日本に視点を置いた場合にのみ言えることであり、「満洲国」の視点が欠落していると言わざるを得ない。もう一つの先行研究である「招待旅行にみる満洲イメージ」（高媛『満蒙開拓青少年義勇軍の旅路』旅の文化研究所編 森話社 2016 年 4 月）は夏目漱石の「満洲」旅行と並べて満鉄招待旅行として日満綴方使節に言及する。この論文では、日満綴方使節を「満洲認識運動」に位置付け、満蒙開拓青少年義勇軍を推進するイベントとして捉えている。この論文も第一回目しか扱っておらず、〈内地〉日本の児童を満蒙開拓青少年義勇軍として送出する国策のキャンペーンとしてしか見なししていない。

二つの先行研究とも 1939 年の日本から「満洲国」へ派遣された日満綴方使節しか考察していない。加えて、使節による綴方のテキスト、特に実際に「満洲国」・日本に旅した経験を綴ったテキストに注目しなかったという問題がある。綴方はいわゆる作文のことであり、明治時代から始まった国語教育法として、日本統治下に置かれた地域で強制的に行われた日本語教育であり、同時に〈外地〉まで普及していった。その源流は大正時代にさかのぼる。生活綴方運動や童心主義の提唱によって、綴方は国語教育法だけではなく、子供の精神を培養し人格を造形する方法として期待された。また、童心を持つ子供が「ありのまま」に表現することが、綴方の到達点として重視され、純粋な子供が真実を書くものだとする神話も形成されるようになった。その子供の精神を鍛錬する点とありのままに真実を語る点は、戦時下において、〈内地〉の国民精神総動員や〈外地〉の帝国主義支配に利用されていくようになる。川村湊が述べたように、綴方とは「極端にいうと、子供たちの内面、内心、その自己の考え方、感じ方というものさえをも、教育という名の下に「帝国」の管理下、監視下に置いてしまう」（『作文のなかの大日本帝国』岩波書店 2000 年 2 月 p.62）ものであり、そうであるがゆえに、児童文化と帝国支配との関係性などを示す重要な研究対象である。

本稿では、日満綴方使節に書かれた綴方から、〈内地〉日本と「満洲国」という両側の次世代の意識を読み取ることができると考える。その意識とは、大人が押し付けた支配論理を吸収しつつ、児童自身の経験から得られる知見と融合した上で再生産したものであり、元の支配論理の完全なる複製ではなく、何らかの変容が生じるはずである。同じく帝国主義のイデオロギーが押し付けられたといっても、異なる環境で育った〈内地〉日本と、「満洲国」の子供が同様の

意識を持つとは限らない点が重要である。

本稿は、「満洲国」を見学した〈内地〉日本の使節によって書かれた『綴方満洲』と、日本を見学した「満洲国」の使節（在満日本人を含む）によって書かれた『綴方日本』を比較することを通して、〈内地〉日本と「満洲国」の子供が如何に異なる文章を書き、如何に異なる認識を持っていたかを明らかにする。その差異から、〈内地〉日本の子供と「満洲国」の子供それぞれにとって、「日本」「満洲国」「日満関係」とは何か、という日満間で交差するまなざし、日満間に生じた日満関係に対する認識の齟齬を呈示することができると考えられる。日満両側の児童を「満洲国」支配に統合する文化言説を解明すると同時に、日満間に潜む複雑な力学も顕示化できる。その複雑な力学こそ、植民地台湾や朝鮮と異なる傀儡国家「満洲国」の重要な特徴であり、戦後日本にも影響し続けるものであろう。

2. 『綴方満洲』から見る日本人の「満洲国」像

『綴方満洲』（満鉄鉄道総局・大阪毎日新聞社・東京日日新聞社編 修学館 1940年6月）は1939年日満綴方使節の活動を記録し、綴方作品をまとめた本である。表紙には旅順で日露戦争の勝利を記念するために建てた表忠塔の前に二人の少年が頭を上げ、胸を張って立っている写真が載っている。内容構成は順に主催者による「序文」、日満綴方使節の「満洲国」での見聞を書いた「綴方紀行」、団長と主催関係者による「所感」、現地の名士による「名士歓迎の辞」、「日満綴方使節選者の言葉」、「日満綴方使節入選文」と五つの部分からなる。

綴方使節の綴方作品は主に「綴方紀行」「日満綴方使節入選文」の二つの部分に収録されている。「日満綴方使節入選文」は、「満洲国」訪問前に子供が懸賞公募に出したもので、「綴方紀行」は「満洲国」での見聞について書いたものである。「紀行綴方」は序文の直後に配置されたことから、子供によって描かれた「満洲国」の真実が最も伝えようとする情報と見なされたことが読み取れる。そのほか、紀行中の活動を記録する写真も多数掲載された。文字で綴られた「満洲」とカメラで捉えられた「満洲」を響きあわせて「満洲」のイメージを伝えようとしたと言えよう。本稿は、使節によって書かれた綴方テキストを分析するものであるため、主に「綴方紀行」と「日満綴方使節入選文」に着目する。

2.1. 自分の未来と関わる移住地としての「満洲国」

『綴方満洲』に収録された綴方テキストの分析を通して、「満洲国」と自身との関係についての〈内地〉日本の子供の思考回路が読み取れる。阪田光昭使節は「少年義勇軍のお兄さん、満洲国を盛にするために、日本の生命線を強くするために、決死の覚悟で出発して下さることを、感謝してのありがた涙です」²（「少年義勇軍を励ます手紙」『綴方満洲』p. 192）と、「日本の生命線」である「満洲国」のために出征したお兄さんへの賛美と感謝を綴り、また見習う決心を示した。また、女子である栗栖静枝使節は「そんな時は、私たちは女でも、御国のためならいつでも、大陸へ行きたいと思ひます」「これからつぎ／＼とお兄さまたちの足音をたどつて、満洲へ満洲へと、日本を植ゑつけねばならぬと決心してゐます」（「少年義勇軍のお兄さまたちへ」『綴方満洲』pp. 187-188）と銃後の少女として献身する決意を示した。どちらも戦時中要求された戦争協力に応える紋切型の文章と言えるが、使節らが「満洲国」を何として見なすのかという点は注目に値する。

阪田使節にとって、「満洲国」は「日本の生命線」であり、日本の子どもたちの未来を左右する大地である。彼は「満洲国」の重要性を認識しているものの、あくまでも「日本の生命線」としての重要性しか想定していない。つまり、「満洲国」の内実をふまえた独自性を無視する傾向が見られるのである。また、多くの綴方では、栗栖使節のように、「満洲国」を「大陸」と呼ぶ。つまり、「満洲国」は、多くの人間が営んでいる「社会」ではなく、何もない「土地」としてイメージされていると言えよう。この二人の綴方では、「満洲国」は日本によって「開拓」されるべき「新大陸」であり、日本はその「新大陸」から多くの利益を獲得できると位置づけられたのである。だからこそ、「日本を植ゑつけねばならぬ」という宗主国を複製する植民地主義の発想が生じたわけである。使節らは日本を複製する場所として「満洲国」の未来像を描き、その複製の担い手は自分であると想定している。したがって、使節が「満洲国」を旅する時、「満洲国」に生きる人々をほとんど描写せず、その代わりに「満洲国」の自然や都市の風景を細かく表現したのである。それも「満洲国」を移住地として見なし、その移住に適するかどうかというところにしか注目しなかったためだと言えよう。

2. 2. 風景としての「満洲国」、風景としての「満洲国」現地人

「満洲国」を旅する時、「満洲国」の現地人についてどう綴ったのか。その数少ない描写を取り上げ、描写のパースペクティブに注目してみよう。使節の文章には、風景の描写に混じって人物像のスケッチが多く描かれた。根岸和之助使節は町の風景を写生する時、「駅を出ると、そこには人力車と馬車が列をつくつてゐた。その車夫は、皆満人だつた。中でも人力を引く満人などの体は、とてもたくましい」（「奉天（一）」『綴方満洲』p. 54）と、満人の車夫について言及する。車夫の描写はレンガ造の家の描写に挟まれており、街の風景の一部として織り込まれている。根岸使節にとって、その「満人」はまるで当時日本で出回っていた「満洲」の絵葉書の登場人物のように、現実社会を生きる実在の人物ではなく、単に観賞される街の風景でしかないだろう。

日満綴方使節は各地の小学校をまわり、その学童と交歓会や座談会に多く参加していたが、具体的な場面はあまり描かれなかった。ただ、「満洲国」学童の日本語の上手さに感心したことには言及する。阪田光昭使節は奉天でも撫順・新京・ハルビンでも「日本語を満洲国の一年生の学童が習つてゐるのを見た僕は、その学童達が習つてゐる日本語の上手なのに、すっかり驚いてしまひました」（「満洲国学童の皆さんへ」『綴方満洲』p. 164）。驚いた後で、「皆さん達は、日本語も満洲語も知つてゐるでせうが、僕は満洲語を知りませんから、皆さん方に恥ずかしいやうな気がします」（「満洲国学童の皆さんへ」『綴方満洲』p. 164）と恥ずかしい感情が生まれたという。日本語教育は植民地を統治するための政策なのだが、支配側に立つ日本語ネイティブは被支配側に対して劣等感を感じるのは植民者らしい優越感が動揺したためだろう。恥ずかしいと漏らした後、「満洲国と日本とが手をにぎりあつていくのには、満洲国の皆さんが日本語を習つて、日本人と同じ生活をしていつたら、日満親善はます／＼固くなるだらうと思ひました」（「満洲国学童の皆さんへ」『綴方満洲』p. 164）と、支配する植民者らしい言説で話題を括った。「満洲国の皆さんが日本語を習つて、日本人と同じ生活を」することを一つのビジョンとして掲げることは、つまり「満洲語」能力を無効化し、「満洲国」を日本に同化させようとしている。「満洲国」が日本になる度合いを測っており、その度合からしか評価しないのである。しかし、自分が「満洲語」が出来ないと気づいた時、その「恥ずかしいやうな気」がする一瞬の動揺は、「満洲国」に出会った時に得られた実感であり、支配論理に亀裂が生じたとも言つてよ

からう。

3. 『綴方日本』から見る「満洲」人の主体性

1939 年行われた日満綴方使節の派遣が成功を納めたため、翌年の 1940 年、「満洲国」から日本へ同じように綴方使節を派遣した。『綴方日本』（鉄道省国際観光局、満鉄・鉄道総局編）は 1940 年に派遣された日満綴方使節の活動を記録し、綴方作品をまとめた本である。奥付がない所から、この本は出版されず、関係者だけに配ったものと思われる。表紙（写真一）には、富士山の写真を背景に、使節が笑顔を見せながら、〈内地〉日本の子供と握手する写真が載っている。裏表紙（写真一）には、咲いている桜の写真の右下に日本・「満洲国」の国旗が並んでいる



（写真一）

小さな写真があった。『綴方満洲』の表紙に登場した表忠塔は近代以降日本帝国拡張の大きな勝利を代表し、所有権を強調するものとされる。それに対して、『綴方日本』の表紙にある富士山と桜は古く正しい日本精神を具像化した伝統的なシンボルであると言えよう。日本精神の下で、国旗が並び、児童たちは握手するような日満友好関係を築くことは、「満洲国」から日本へ綴方

使節を派遣する最も重要な狙いと設定されただろう。

見返しの開き一面をもって見学コースの手書き地図が載っている。地名のみならず、各見学地のシンボルも表記されている。それらのシンボルの多くは日本の伝統を語る古跡となっており、例えば、東京には皇居と東京駅、大阪には大阪城、奈良には大仏が併記されている。表紙と見返しからは、〈内地〉日本は具体的に実在する国家であるというより、伝統あるいは作られた精神の根源と設定されたことがうかがえる。内容構成は順に関係者による祝辞や挨拶を含む「序文にかへて」、訪問日程に従って編集した綴方使節によって綴られた紀行文³、帰国後座談会などの場で語った「日本の印象」、使節による「当選綴方」と「推薦児童綴方」、関係者による「感想」と概ね五つの部分に分けられている。『綴方満洲』と同じように、紀行綴方は序文の直後に配置され、重要視されている。また、文章のほか、写真や関連の歌・詩なども多数掲載されている。

1940 年の懸賞綴方のテーマは「憧れの日本」と「日満親善」である。「当選綴方」には、日本、朝鮮、満洲⁴の三民族各二名の学童による綴方が六篇収録されている。そのほか、「推薦児童綴方」には、以外の二民族——蒙古、白系ロシア各二名の学童による綴方が四篇収録されている。公募で当選綴方を決めた後、民族協和をアピールするため、蒙ロ二族の子供を推薦という形で選抜したと考えられる。全ての綴方は日本語で書かれているが、ロシア児童の綴方はカタカナで書かれており、簡単な言葉を用いて些細な日常しか表現できていない。1937 年日中戦争の勃発と 1938 年満蒙開拓青少年義勇軍派遣の推進などで、「満洲国」においては、日満間に

より一層親密な関係を結ばなければいけないという「親日」の課題が迫っていた。そこで、懸賞綴方テーマの設定から、「満洲国」の子供に、〈内地〉日本に親近感を覚えさせ、〈内地〉日本に協力させようとする意図が見られる。本節は〈内地〉日本を旅する「満洲国」の綴方使節によって書かれた「当選綴方」と「推薦児童綴方」、紀行文及び「日本の印象」を中心に分析し、「満洲国」の子供たちが〈内地〉日本をどのようなものとして捉えたのか、〈内地〉日本との出会いを通して「満洲国」をどう再発見したのか、日満関係をどう位置付けたのか、といった疑問を検討してみる。

3. 1. 「満洲国」主人公の自覚と自負

「満洲国」の使節らは、日本での人々の生活、日本人との交流などについて詳細に描き、日本を旅するなかで気づいた疑問や、「満洲国」との違いを記している。例えば、蒙古人のインジュイ使節は日本の布団が蒙古より大きいことに驚き、「私は日本人は着物はウスイ寒い着物を着るのに、何うして暑くても大きなフトンに寝るのかと不思議に思」(「厳島と鹿」『綴方日本』p. 31) った。

「満洲国」の他民族はともかく、在満日本人にとっても多くの不思議な発見があった。在満日本人として、当選綴方に「故郷」日本へ憧れの思いを綴った戸田智慧子使節は、紀行文において「満洲国」の立場に立って日本を眼差す。戸田使節は日本の家について綴った際、「満洲国」の「堂々たる建物」と比較して、〈内地〉日本のほうは「その向ふに木で造ったお家がずらりと並んである。門にはよごれた日の丸の旗がゆれてゐた。冬になつて北風が吹いてきたらスーと吹飛んで行つてしまはないか、又冬ずい分寒くないか、若し一軒に火事が起きたら最後、あそこにある家全部が燃えてしまふだらう」(「下関から宮島まで」『綴方日本』p. 26) と心配した。そこで、「お家だけは満洲の方がいゝな一と思つた」が、「それは内地は地震が多いためと、冬も余り満洲の様に寒くないからだと思つて、ビューローの先生に聞くと、さうださうだとニコニコしてほめて下さつたので嬉しかった」(「下関から宮島まで」『綴方日本』p. 27) と大人の要望に見合う結論に辿り、疑問を解消したが、「満洲」のほうが優る感想こそ素直な本音だったかもしれない。

また、戸田使節は日本の汽車に乗る時、「あじあ号」が走る「満洲国」と比較して、日本のほうは「何となくせまい様な感じがした。又いやにへんなゆゑんのほひがトンネルふに入る度にぷんと鼻をさす」と不評し、「内地の汽車よりは満洲の方が広くて気持がいゝな一と思と「あじあ」を内地の人々にお知らせしていばつてやりたくなつた」(「下関から宮島まで」『綴方日本』p. 27) と「満洲国」を先進的に位置づける。彼女は「満洲国」を日本に従属すると考えず、むしろ日本との出会いを通して、「満洲国」の優位性を確認してしまったのである。

日本の児童と交流する場面においても、「満洲国」の先進性を意識しつつ、日本を体験していた。大阪の小学生と座談会に参加した朝鮮人の朴恩淑使節は「日本で一番スピードの早い汽車の名前は何と云ふのですか」、「大阪は工場の沢山あるところだといはれてゐますが、どの工場がその中でも一番有名ですか」(「橋が千三百三十三」『綴方日本』p. 41) と日本の児童に質問した。アジア一番早い汽車と称されるのが「満洲国」の特急アジア号であることを、朴恩淑使節は知らないわけがない。「満洲国」は日本の近代化の実験場として、開発主義はそのイデオロギーにおいて重要な位置を占めており、実際に植民地的近代化に基づく開発が急激に進展していた。そのような「満洲国」で育った「満洲国」次世代は、その開発の成果を誇りとみなし、開発主義の視点から、今度は〈内地〉日本を評価しようとしたのである。日本の汽車や工場に

ついて聞くというのは、それが「満洲国」にいる人の一番の関心を表していると同時に、〈内地〉日本を含む世界中のどこにも負けたくない自負があふれているのではなかろうか。

もう一つ注目したいのは、使節らは日本を見学しつつ、「満洲国」を発展させる方策を考えていたことである。蒙古少年のスデル・ヂャブ使節がガンヂユリ廟で旅の感想について報告しており、報告原稿に基づいた綴方は「日本の印象」部分に収められている。

日本から帰る時、僕は日本の何を見ても驚いてばかり来たのに、蒙古には日本人を驚かせる何物もないのかと淋しく思ひ、悲しく感じて居ましたが、この平原を走つて居る間に、自分達には小さい時から見慣れて来たので、少しも珍しくないこの平原こそ、日本人が見たら驚くに違ひないと気づきました。さうして二千頭も三千頭も居る馬群や牛群をわづか二三人の少年が番をして居る所を見せたら、キツト大阪の朝日新聞社の機械を見て僕が驚いた時の様に、又東京駅を降りた時自分の目が間違ひではないかと思つた時の様に、日本人もビツクリするに違ひないと思ひ、蒙古人にも矢張り強い力があるのだ、と気づきました。（「ガンヂユリ廟で報告」『綴方日本』p. 122）

スデル・ヂャブ使節は〈内地〉日本を見る時、常に「満洲国」に暮らしている蒙古人の発展を意識している。彼は〈内地〉日本人と蒙古人の差異を述べるにとどまらず、〈内地〉日本を見て驚いたところ、「蒙古には日本人を驚かせる何物もないのかと淋しく思ひ、悲しく感じ」、そこで「この平原を走つて居る間に、自分達には小さい時から見慣れて来たので、少しも珍しくないこの平原こそ、日本人が見たら驚くに違ひないと気づきました」と、〈内地〉日本に対抗できる蒙古の長所を探そうとした。更に、「さうして二千頭も三千頭も居る馬群や牛群をわづか二三人の少年が番をして居る所を見せたら」、自身が〈内地〉日本を見て驚いたと同じように、「日本人もビツクリするに違ひない」と辿り着き、「蒙古人にも矢張り強い力があるのだ」と蒙古民族としての自己肯定感を獲得するに至る。

また、スデル・ヂャブ使節は、日本の良さを蒙古人の生活に導入することにこだわっている。新潟の海を見た時、草原で暮らしている蒙古人があまり泳げないと思案し、「弘安四年「フビライ将軍」が博多の海で日本軍と戦つて負けたのも、蒙古兵は僕のような兵隊だつたからだと思ひました。僕は野原へ帰つたら「イビン川」の水は冷たいけれども、水泳を練習して、水を恐れない蒙古人にならなければならないと思ひました」（「新潟の海」『綴方日本』p. 114）と自民族をより強くする方法を考案していた。ガンヂユリ廟での報告する時も、「最初僕はきれいな日本の話だけするつもりで居ましたが、五百か六百の羊を飼ふ事にも今は日本の力、蒙古の力が必要なのだと考へ、声を大きくして日本人の神社や皇室に対する考へ、学校や交通の事を話し、蒙古人はどうしても学校を作り、学校へ誰でも行かねばならぬ事、馬や羊を改良できるのは蒙古人の立派な力であり、その力を強く強くしなければならぬと話しました」（「ガンヂユリ廟で報告」『綴方日本』p. 123）と、蒙古民族が発展するために日本を参考にすべきだと主張している。彼にとって、〈内地〉日本への旅は、日本を聖地として巡礼するというよりも、蒙古をさらに発展させるための、日本の長を取り自身の短を補うものであった。

日本人の後藤輝使節も、スデル・ヂャブ使節と同じように、旅で発見した〈内地〉日本の長所を「満洲国」の改善に導入する意欲を示した。彼は東京を廻り、「さすがは日本の首都東京だ、満洲の国都も此のやうに清潔に立派にしなくては恥づかしいとつくづく思ふ」（「東京の日記」

『綴方日本』p. 93) と日本の良さを導入し、「満洲国」を更に立派に建設する方向に持っていった。そこには「満洲国」のさらなる発展に対する期待が示される一方で、満洲国の未来は自ら担うという自覚も表れていると言える。

3. 2. 日本民族の根源の象徴としての神社

〈内地〉日本から学ぼうという意欲をしばしば表明するものの、日本近代化の先進性は、使節の綴方からあまり登場しなかった。それに対して、使節ら、特に在満日本人の使節らは日本の自然環境に恵まれる神社を惜しまずに描いた。在満日本人の戸田智慧子使節が書いた当選綴方「憧れの日本」において、彼女は〈内地〉日本にいるお祖母さんを思い、小さい頃叔父さんとの温かい思い出を綴りつつ、戦死した叔父さんを祀る靖国神社に対して思いを寄せている。

私達と一緒に内地へ帰られるお約束をしながら、到々あこがれの郷里へも帰られないで戦死されてしまった叔父さんの事を思ふと、何か胸がいつぱいになった。私は此の叔父さんと靖国神社でお会ひするため、今年の夏休こそきつと内地へ帰らうとお母さんと固くお約束した。二年三年と待ちに待たれたお祖母さんもどんなお顔で、私達の帰りを山形の故郷で待つてゐられる事だらう。今度こそ内地へ帰られる。三年前から夢にまで見た宮城も富士も、そして靖国神社も故郷の山も、皆今私の胸の中で生々と躍つて居る。('あこがれの日本'『綴方日本』p. 148)

お祖母さんと会ったことがないことから、戸田使節は「満洲」生まれもしくは小さい頃から渡満したと考えられる。「一度も会った事のないお祖母さん」から「内地へ帰る日を楽しみにして居た」という「日本への憧れ」へと話をつなげて行く。日本国内の学童による綴方と同じく、靖国神社や宮城などを賛美の対象にしたが、それと率直に皇国、聖戦などのキーワードに結びつけず、「此の叔父さんと靖国神社でお会ひする」、「宮城も富士も、そして靖国神社も故郷の山も、皆今私の胸の中で生々と躍つて居る」と、家族と故郷を想起した。戸田使節にとって、靖国神社は天皇制国家というより、自分の根源につながる故郷を意味するのである。そして、実際に靖国神社に行った戸田使節は紀行文ではこう書いている。

「叔父さん。智慧子は叔父さんとあんなに固く約束をして置きながら内地へ一緒に帰ることが出来ませんでしたけれども、今日こそ栄えある五族の代表としてお参りに来ました」と、しばし社前にぬかづきました。目をつむつて静かに頭を下げてみると在りし日の叔父さんのお姿が次から次へと浮かんで来ます。('靖国神社'『綴方日本』p. 86)

戸田使節は靖国神社を参拝する意味を「叔父さんとお会ひする」ことに置いている。その叔父さんは「上海の激戦で立派に戦死をなさつた」「御国の勇士」であるが、戸田使節は叔父さんについて、もっぱら「満洲」にいた頃の温かい人間関係をめぐる日常エピソードを語った。そして、約束を守らない代わりに、「栄えある五族の代表としてお参りに来ました」と誇らしく叔父さんに伝え、五族の代表に選ばれたことは誇りとされており、「内地へ一緒に帰る」とことと対等に自慢できることとして位置付けられたと言えよう。

彼女は他の神社を参拝する時も同じような描き方をした。伊勢神宮の皇大神宮を参拝に行った時、「一生に一度日本人は、キツト御詣りしなければならないその務めを果すと共に満洲の子

供一同の代りにもお詣りするのだと思ふと、体が自然にしやんとして一人で落ちついて来ます」（「皇大神宮」『綴方日本』p. 57）と述べた。そして、参道を歩く途中で出会った風景を詳細に描写した後、「我が日本の歴史と共に、千古ゆるがぬ大木の威容がなんとも言へず力強く思はれて、皆しばらくの間、うつとりと見上げてゐました」（「皇大神宮」『綴方日本』p. 58）と日本の歴史を代表する大木に敬意を払った場面を描いている。日本の自然と日本の歴史、そして日本人としての誇りと関連させると同時に、「満洲の子供一同の代り」という「満洲」代表の視点からも物事を観察し理解しているのである。彼女は、日本人を家族・故郷、そして伝統・歴史に関わり、自らのルーツを語る概念と見なす一方で、「満洲の子供」として生きる責任感と自覚もしっかり持っているのである。

靖国神社と同じ皇国忠誠心を代表する宮城についても、〈内地〉日本人と異なる読み方を取っている。後藤輝使節は二重橋を歩く時の心境を「日本人が誰でもあこがれて居るこの宮城に、今おまゐりする事が出来て、天皇陛下の赤子である幸福さをしみじみ思ひ、立派な日本人にならなければと深く／＼心に誓った」（「東京の日記」『綴方日本』pp. 92-93）と綴った。

一見、〈内地〉日本の子供と同じように天皇に対して敬意を払い、忠誠心を謳ったが、『綴方満洲』に収録される同じテーマの綴方と対照してみれば、その差は明白になる。第一回目、〈内地〉日本代表として「満洲国」へ派遣された小竹八重使節は宮城遥拝について、「出征していらつしやる兵隊さん達の武運長久をお祈りします。兵隊さん達は天皇陛下の御ために、勇ましく働いていらつしやいますが、私も兵隊さんに負けないやうに、忠義をつくさうと決心して、勉強にとりかゝります」（「満洲国のお友達へ」『綴方日本』p. 215）と綴った。それに比べて、在満日本人である後藤使節は、〈内地〉日本人である小竹使節のように「天皇陛下の御ために、」「忠義をつくさう」と皇国への忠誠心を強調せず、「立派な日本人にならなければ」という自らの民族に対する自尊心を高めたのである。在満日本人の子供は、日本について言及するとき、日本という国家ではなく、日本民族をイメージしている。そこで、天皇崇拝は単なる日本民族の伝統的精神の根源として考えているのであろう。無論、その日本民族を「満洲国」の一員に位置づけること自体、「満洲国」を支配する高慢さも帯びているだろうが、〈内地〉日本の子供と異なる位置付け方をすることを無視してはいけないう重要な差異だと考えられる。

3. 3. 民族協和のレトリック

「満洲国」の綴方使節の特徴として、使節は多民族の子供によって構成されていることが挙げられる。そのため、『綴方日本』の綴方には、『綴方満洲』に見られない「満洲国」のもう一つのマスターナラティブである「民族協和」がうかがわれる。多民族の子供から、「民族協和」をそれぞれどのように解釈したのか。朝鮮人の白慶順使節は公園で「満洲人」と相撲を取って仲を深めた話を「私の日満親善」として綴った。

南側のベンチに腰を掛けてゐる満洲人がやつて来て、「やあ君達元気だね。君達は相当力があるだらうね。この少年とすまふをとつて見なさい。」と少年の頭を撫でながら言つた。（略）先程から僕達の様子を見てゐた白い人絹で作つた朝鮮服を着た人が、口には長いきせるをくはへて煙草の煙をぽかぽかと出しながらやつて来て、「何だ。君達は意気地がないぞ。こんな満洲人を恐れてそれでも男か、やれよ。」とおしたてるので、「ではやりませう。」と僕は仕方なくそのまゝ返事をして、上着をぬぎ捨てて取組んだ。（略）

僕は二回取組んだ。さうして一回は負けた。僕達はすぐさま汗をふいて、しばらく休んで公園を出た。「又来いよ。」と満洲人が言つたので、「うん又来るよ。」と言つて別れた。以前は満洲人とけんかをする事が多かつたが、今はそれもなくなつた。それも一に協同心が強くなつたからだと嬉しくてたまらない。僕はこれから一層日満親善のため、いや東洋平和のために朝鮮民族の良いところを見せてやらうと決心してゐる。（「私の日満親善」『綴方日本』pp. 149-151）

白慶順使節が考えた日満親善とは、朝鮮人と「満洲人」と相撲を取るように、各民族の子供がお互いに競争することを通して、「協同心が強くな」ることである。競争を肯定的な意味で捉えるゆえに、「朝鮮民族の良いところを見せ」ることが「日満親善」、「東洋平和」に機能するという有効性を持ち、重要な役割を果たすことにつながる。彼の綴方には、民族の特徴性を読者に提示する場面が数箇所ある。「白い人絹で作った朝鮮服を着た」おじいさんたちが朝鮮の子供を励ます場面はその典型的な例といえるだろう。植民地朝鮮では、民族性が消極的に捉えられ、抹殺される対象になったのとは反対に、「満洲」において、逆に支配の物語に同調するものになったのである。このように、各民族の子供が自民族の「良いところ」を発揮し、他民族と競争することを通して、「五族協和」を達成するというレトリックが「満洲国」の綴方使節の綴方に潜在している。ただし、在満日本人が民族間競争に参加する文章が殆ど見当たらないことが示唆するように、植民者対被植民者の支配構造が背後に潜んでいることも無視してはならない。

では、在満日本人は「五族協和」の支配論理にどのように組み込まれるのであろうか。在満日本人の後藤輝使節は公募綴方「張さん」（『綴方日本』pp. 141-144）において、中国人張さんとの付き合いについて綴った。張さんは後藤使節の「お父さんと同じ会社に」いる「満人のボーイさん」であり、「洋車を持つて居るので毎朝のやうにお父さんの迎へに来てくれた」後藤家に奉仕する立場に置かれている。後藤家に泊まって水道管理を頼まれた時、張さんは「大よろこびで、すぐ来てくれると言つた」。張さんが評価される前提は熱心に協力してくれることであり、「お父さんが出かけるまでの間、ちつとしてゐた事は殆どない。誰もたのまないのに、春先には野菜や花の苗を持つて来て畠を作つてくれ、夏は草取り、水まき、秋は広い庭の枯葉を隅々まできれいにかき集めて焼いてくれた。雪の降つた朝など取りわけ早く来て、雪をかき寄せて道をつけてくれた」ことで「張さんは全く感心だ」と後藤家の評判を得た。張さんと離れた後でも、「張さん達どうしてるでせうね。もう一度会いたいね」と後藤家で話題になる。このような経験から後藤使節は「僕はかうした親善の芽をこれから大きく伸ばして行かうと思つてゐる」と日満親善の決心を謳った。明らかに、張さんと後藤家は上下関係を背景にして交流を行った。そのような関係性に基づき、張さんを評価するポイントは、後藤家に積極的に協力することである。つまり、日本人に積極的に協力するのは中国人の美德とされており、協力的な中国人と緊密な関係を結ぶのは「満洲国」における「日満親善」となっているのである。

朝鮮人使節と在満日本人使節が「満洲国」内部における「日満親善」をテーマに書いたものとは異なり、「満洲人」の楊春仁使節と董翠蘭使節の綴方は、〈内地〉日本の子供と文通の友達になる話である。楊春仁使節は日本の読物を寄付してくれた事をきっかけに、〈内地〉日本人と文通するようになり、日本のことがわかり、好きになったという。また、董翠蘭使節は京都にいる和歌姉妹との文通について綴った。そして、京都で和歌姉妹と実際に会って交流し、「亜細亜民族は皆、東洋の永久の平和の為、一致団結しなければいけない時です。私達少女同士仲よくしませう。日本の皆さんに是非お会ひしたい、お話したい、日本に行つて皆さんの生活をぢ

かに見て、日本の少女の美しい心を理解し、皆さんとお友達になりたい」（『憧れの日本』『綴方日本』pp. 159-160）と訴えた。二人の綴方において、〈内地〉日本の子供と日満親善、そして日本を賞賛する言葉やプロパガンダが連呼された。日中戦争の勃発や抗日運動の活発化を目前にして、当時の「満洲国」人口の多数を占める中国人が〈内地〉日本に対して好意を抱かせる課題が迫られていた。そのため、中国人の使節に「国家」としての日本と「日満親善」の関係を築くことが主張させたのだろう。

4. おわりに——「満洲国」はだれのモノなのか

本稿は『綴方満洲』と『綴方日本』という対照的な二冊を取り上げ、〈内地〉日本と「満洲国」の子供によって書かれた綴方から、「満洲国」内部の複雑性を示したと同時に、日満両側が持っている日満関係に対する認識の齟齬を読み取った。

〈内地〉日本からの使節は「満洲国」を単なる日本に利用できる土地とみなし、「満洲国」の現地人を「風景」のように眺め、実在する「満洲国」社会と距離を置いていた。植民者としての自己認識が動揺した場面も見られるが、現地児童と交流する場面の少なさや、日本語教育に対する過剰な陶醉から、日満親善の虚偽性が窺われる。〈内地〉日本からの使節は、「満洲国」を完全に〈内地〉日本に支配され、〈内地〉日本人が移住する新天地と見なしているのである。「満洲国」の日本への同化を評価するその姿勢は、完全なる宗主国対植民地という関係を想定した上で成り立つものである。

それに対して、「満洲国」からの使節によって書かれた綴方を見てみると、民族を問わず、彼・彼女らは「満洲国」が完全に〈内地〉日本の植民地になると想定しなかったことは明らかである。「満洲国」からの使節は、常に「満洲国」と日本と比較し、両者の良し悪しについて思考している。その比較を通して、かえって多くの場面では、「満洲国」の多様な優位性を確かめた。「満洲国」からの使節は、「満洲国」が日本と対等な立場に立つことを前提に、協力関係を築くことを想定していたのだろう。「満洲国」の先進性を誇らしく〈内地〉日本に見せると同時に、日本の先進的な経験を「満洲国」の建設に取り入れ、「満洲国」を発展させようとしたのである。自らの手によって、「満洲国」を建設し、未来を築く意欲が強く表れている。

「満洲国」の子供による綴方には、〈内地〉日本人には表現できなかった「満洲国」内部に潜む複雑な民族関係が描かれている。「満洲国」からの使節の内部に目を向けると、民族による差異が見られる。在満日本人の使節は、〈内地〉日本人と同一視せず、日本に民族的なルーツを持ちつつも、「満洲国」に居住する在満日本人と自らをアイデンティファイした。また、日本人以外の他民族が、互いに競争しつつ、共に進歩していく「民族協和」のレトリックが文章に組み込まれている。ただ一方で、他民族が在満日本人と競争する表現は許されない。在満日本人との競争や対抗が描けなかったことから、「満洲国」内部に置かれる日本人が優位にたつ植民地主義的ポリティクスが垣間見えるのである。

本稿は日本の子供と「満洲国」の子供がそれぞれ持つ日本、及び「満洲国」、並びに日満関係に関する認識の齟齬を分析してみた。そこで、「満洲国」には、〈内地〉日本と差異化する子供＝「満洲」の次世代が存在したことがわかった。もちろん、本稿で得られた知見は、戦前日本の帝国主義に免罪符を与えるためではない。むしろ、この齟齬を認識してはじめて、台湾や朝鮮などのほかの植民地と異なる「満洲国」の特徴性を論じることができると考えられる。それ

は、「満洲国」とは何だったのかという根本的な問いにつながるのである。

更に、異なる認識を持つ在満日本人の少年少女は、戦後になって大量に日本本土に引き揚げて来た。彼・彼女らの「満洲」における経験、内面化した在満日本人ならではのイデオロギーを抱えつつ、戦後日本社会と向き合うことになる。同時に、「満洲国」の教育を受けた他民族の少年少女は日本人が敗退して去った後で、被植民者だった経験をどのように位置付け、克服すればよいのかという課題に直面する。歴史を探求しなければ、いま・ここについて語ることはできない。「満洲国」にいた子供と同時代の日本〈内地〉人との間に、大きな認識の溝があったことに気づかなければならない。戦後日本社会の在り方または戦後の日本とアジアとの関係について考察する際、この戦前において生じた認識の齟齬こそ、諸問題の歴史的根源を探る切口を与えてくれると考えられる。

注

- 1 本稿で扱う 1939 年と 1940 年の綴方使節募集概況を文末の（表一）に、訪問日程を文末の（表二）にまとめている。活動そのものも非常に興味深く思われるが、本稿は作文のテキスト分析を中心に論じるため、活動に関しては別稿にて論じる。
- 2 本稿の引用文に関して、仮名遣いは旧仮名使いを用い、漢字は原則新字体を用いる。
- 3 その部分は訪問スケジュールごとに章をわけている。「いよいよ出発」から「初めて見た海」、「日本上陸の日」、解散式を記録する「懐かしい満洲」まで計 18 章にわけられている。
- 4 「満洲国」時代において、「満洲」人あるいは「満人」は一般的に中国人を指す。

（表一）綴方使節募集概況

| | 1939 年 8 月 10 日～8 月 29 日 | 1940 年 7 月 2 日～7 月 20 日 |
|------|---|--|
| コース | 日本⇒満洲国 | 満洲国⇒日本 |
| 主催者 | 満鉄鉄道総局、東京日日新聞社、大阪毎日新聞社 | 満鉄鉄道総局、鉄道省国際観光局 |
| 後援者 | 文部省、拓務省、関東局、満洲国民生部、満洲国協和会、満洲国大使館 | 文部省、対満事務局、満洲国民生部、在満教務部、満洲国総務庁、満洲帝国協和会、満洲観光連盟、満洲日日新聞社 |
| 共催媒体 | 『東日小学生新聞』、『大毎小学生新聞』 | 『満洲日日新聞』 |
| 選者 | 文部省教科書編輯官石森延男、東日大毎小学生新聞顧問菊池寛、同紙顧問久米正雄、同紙顧問久留島武彦、同紙顧問安倍季雄 ¹ | 満洲国弘報部長武藤富男、関東局学務課長・在満教務部教務課長入江巖、鉄道省出張所長阿部牧太郎、鉄道総局旅客課長野間口英喜、鉄道総局弘報課長芝田研三、民生部編審官寺田喜治郎、満日編輯局長山内一郎、満日事業部長山内友一 |

¹ 満洲国教科書編輯官寺田喜次郎は公募広告に名前が載せられたが、1939 年 7 月 19 日の『東日小学生新聞』記事「日満綴方使節決定の厳重な審査会始る」によると、実際審査に参加したのは寺田を除いた五名の審査官であったという。

| | | |
|------|--|---|
| 主題 | 「少年義勇軍を励ます手紙」 「満洲大陸守備の勇士を慰問する手紙」 「満人学童に送る親善の手紙」 「満洲を思う」 | 「あこがれの日本」 「なぜ日本へ行きたいか」 「私の日満親善」 「日本へのお土産話」 |
| 応募数 | 2395 点 | 不明 |
| 団長 | 木内キヤウ (唯一の女性校長・著名教育者) | 張寿昌 (満洲国民生部教司教学官) |
| 使節人選 | 狩野重代(千葉県勝浦町勝浦校五年) 根岸和之助(埼玉県北埼玉郡羽生町羽生校六年) 立川照夫(山梨県西八代郡高田村高田校六年) 丹野富太(宮城県荏田郡宮村宮校六年) 小竹八重(東京市本所区柳元校六年) 栗岡章介(大阪府豊能郡箕面校五年) 阪田光昭(広島県豊田郡幸崎校五年) 岡田清子(門司市丸山松本校五年) 栗栖静枝(京都市第二衣笠校五年) 堤享子(長崎市勝山校六年) | 日本：後藤輝(新京西広場校六年生) 戸田智慧子(奉天敷島校六年生) 朝鮮：白慶順(奉天西塔校六年生) 朴恩淑(新京永楽校六年生) 満洲：陽春仁(奉天公立高国民優級校二年) 董萃蘭(同上) 蒙古：スデルヂャプ(素倫族公立国優級校二年生) インジュイ(同上) 白系ロシア：チュリマン＝シャミル(哈爾濱砲隊街国民優級校二年生) アンナ＝ウイエッカ(哈爾濱郵政街国民優級校二年生) |

(表二) 綴方使節団訪問日程

| 綴方使節訪問スケジュール | |
|---|---|
| 第一回目 1939 年 8 月 日本⇒満洲国 | 第二回目 1940 年 7 月 満洲国⇒日本 |
| 10 日 宮城遙拝。明治神宮、靖国神社参拝。 9 時九段軍人会館にて壮行会。特急「富士」で東京駅出発。 | 2 日 奉天発。 |
| 11 日 午前 9 時 25 分下関駅着。午後 6 時釜山着。6 時 50 分急行「ひかり」で奉天へ。 | 3 日 大連発、鴨緑丸。 |
| 12 日 午後 4 時 55 分奉天着。駅頭にて奉天市長・副市長らの令嬢が花束呈上。奉天忠霊塔・殉職満鉄社員記念碑・奉天神社参拝。 | 5 日 下関着、宮島泊、厳島神社参拝。 |
| 13 日 国立博物館・北陵見学。北塔・柳條溝・北大宮見学。陸軍病院慰問。奉天中央放送局放送参加。日満学童座談会。 | 6 日 午前 11 時 2 分宮島発、午後 6 時 25 分大阪駅着(大阪市学童駅頭出迎)自動車で宿舍へ。 |
| 14 日 満洲日日、奉天毎日、盛京時報の各新聞社・奉天省日本人学校組合・奉天市公署・満鉄鉄道総局へ挨拶回り。「日満綴方使節歓 | 7 日 午前 9 時宿舍発、地下鉄・阪神電車で甲子園野球場・海水浴場・水族館・阪神パークなどを見学、午後六甲山へ、午後 4 時大阪帰着、地下鉄で宿舍へ、午後六時支那事変記念放送児童の時間日満学童交歓放送、午後 7 時宿舍帰着。 |
| | 8 日 午後 8 時 30 分宿舍発、バスで大阪城・教育塔見学、午前 10 時大阪市役所訪問、大阪 |

| | |
|--|---|
| <p>迎学童大会」参加。満鉄招宴参加。</p> <p>15日 奉天から撫順へ。協和少年団と交歓。市公署・炭鉱事務所訪問。露天掘・製油工場見学。奉天帰着。</p> <p>16日 午前7時15分奉天発、11時42分新京着。新京神社・忠霊塔参拝。寛城子戦跡・宮廷府・回教寺院・大同広場・南嶺戦跡一巡。</p> <p>17日 関東軍司令部・国务院・協和会本部・駐満大使館・関東局挨拶回り。大経路国民学校・白菊小学校訪問。陸軍・恩賜治安部病院慰問。</p> <p>18日 建国廟拝観。首都協和少年団主催「綴方使節歓迎交歓大会」出席。</p> <p>19日 新京からハルビンへ。白系ロシア学童と交歓。ハルビン神社参拝。病院慰問。ロシア人小学校参観。</p> <p>20日 中央寺院見学。忠霊塔、志士・烈士の碑参拝。ハルビン満蒙開拓青年訓練所見学。</p> <p>21日 「アジア号」でハルビンから大連へ。</p> <p>22日 午後7時45分大連着。満鉄従業員殉職碑参拝。</p> <p>23日 忠霊塔大連神社参拝。関東州庁・満鉄本部・新聞社訪問。満洲資源館見学。弥生高女訪問。大連学童の家にホームステイ。</p> <p>24日 満鉄総裁邸訪問、招宴参加。「さようなら綴方使節」全満放送。</p> <p>25日 朝7時バスで旅順へ。市役所の歓迎会に列席。陸・海軍病院慰問。白玉山表忠塔・納骨祠参拝。旅順戦跡見学。招宴参加。</p> <p>26日 大連出帆。</p> <p>29日 午前大阪着。歓迎学童大会出席。解散。</p> <p>30日 東京にて関東出身使節らが歓迎式。</p> | <p>市長に対する新京・奉天・ハルビン各市長からのメッセージ伝達と挨拶、同10時半観光艇で各川筋見学、午後1時精華小学校着、学校見学ならびに学童交歓会出席、午後3時20分大朝社挨拶ならびに見学、同4時20分大毎新聞社着、挨拶ならびに新聞社主催の綴方使節歓迎宴出席、社内見学、終わって宿舎帰着。</p> <p>9日 午前8時45分大阪駅着、同9時大阪駅発、急電で京都へ（大阪市学童見送り）。本願寺、御所、嵐山、動物園、清水寺などを見学。市長訪問。</p> <p>10日 桃山御陵・乃木神社・橿原神宮参拝、奈良見物。</p> <p>11日 伊勢皇大神宮参拝、名古屋へ。名古屋市内見学。</p> <p>12日 午後5時20分東京上野駅着、二重橋にて宮城遥拝後、6時半から東日新聞社にて歓迎晩餐会。</p> <p>13日 午前8時半から首相、陸相、拓相、文相、満洲国大使、満鉄支社を訪問、午後1時半から4時まで麹町区永田町校で、東京市主催の歓迎会に参加。</p> <p>14日 東京市内見学。靖国神社、明治神宮に参拝した後、帝国議事堂、上野動物園、銀座、浅草などの市内名所を見学。</p> <p>15日 日光見学。東照宮、中禅寺湖、華厳滝を見学</p> <p>16日 深川区清澄公園にて昨年満洲へ旅行をした綴方使節と「満洲国綴方使節お別れの会」に参加。</p> <p>18日 午前中、新潟市内見学。新潟発白山丸に乗船、帰満。</p> <p>20日 新京着。</p> <p>21日 主催者、後援者の関係箇所挨拶廻り。報告大会。ラジオ放送出演。解散。</p> |
|--|---|